

子ども・青年の生きる自信の核を育てる

実践の展望

内島 貞雄

はじめに

今回の通常の参加者は一五名ほどであったが、一日目には大谷短大・保育科の学生一三名も加わってくれた。

自己紹介の後、共同研究者の富田充保さんから四つの検討課題が示された。

①福祉的な視点を含んで教育実践を展開する。

②自分の人生、今後の社会に対する根源的な問いを大切に、聞き取る。

③基本的な学力の基礎の形成や定着を図るさいに、子どもの意識や表現をとらえながら、教師と子どもたちとの関係と切り離さないでとりくむ。

④教育政策や行政の動きを批判的にとらえる。

今回の分科会では、これらの課題がかなり深められたように思う。

一、小学校での実践

1 表現活動と学力保障

伊達市立稀府（まれつぶ）小学校の佐茂厚美さんと安住理歌さんから「子どもたちに本当につきたい学力とそれを裏支えする文化活動」と題するレポートがあった。

佐茂さんは四年ぶりの通常学級の担任となり一年生の担当。安住さんは五年生からの持ち上がりの六年生担任である。六年生が一年生のお世話をするという関係もありこの実践が成立している。

まず一年生の様子から。児童数は八名（当日未確認、資料から推測）。夏休み前にある子が「先生、学校が楽しいのは一年生の時だけって、本当？」と聞いてきたという。先生たちにもそうした認識が見られ、いずれ職場全体でじっくり議論すべきことだととらえた。

最初の参観日では、資料を作り一年生は心理的には幼児期で

あることや、基礎にたっぷり時間をかけ五感で学ぶ学習を心がけ、豊かな遊びや文化を取り入れ、つまらぬ照れのない表現力をつけさせることを説明した。

毎朝六年生がやってきて、オセロやだるま落としなどで遊んでくれ、八時一五分からは全員を席に座らせて本の読み聞かせなどをしてくれる。一年生に働きかけることで六年生も自分自身を鍛えているという。

けんかの仲直りの様子や長音の学習、漢字の雨の「あめ」と「あま」の読み方の区別、学芸会の感想など当日は時間の関係で触れられなかった参考になることが、配付された資料に掲載されている。

安住さんの担当する六年生は一名。五年生の時の学芸会で二部合唱(ほんの何小節かを二つのパートに分けてお茶を濁したそう)と三グループでの輪唱、メインは器楽合奏だった。六年生になり、最高学年として「学校を引っ張っていいこう、全校の手本になろう」という意識を持たせて生活する。全校一斉に歌う「たなばた」では一年生と一緒に歌う機会が増え、一年生が体を「ポンプ」にして息をたくさん吸って歌う姿に影響を受け、歌が変わり気持ちも高まる。

同時に一学期の成果発表として「カノン」という曲の笛での演奏があった。暗譜して演奏という目標に向け「ドレミ」をつ

けて必死に歌う練習をするが後一歩何か足りない。体を動かして歌うことの提案に男子は応じたが、女子は乗ってこないの音の高低を表すために手を動かすようにした。

こうした経過をふまえて、安住さんはもつと「力のある教材」について考え始めていた。そして学芸会での取り組みとして佐茂さんからギリシャ神話をもとにした台本「プロメテウスの火」を薦められる。難解な七曲と朗読とで構成されるものであり三曲にはソロの部分もあるが、それに乗ってみることにする。

話の内容をかみ砕いて伝え、後に台本にメッセージ性を持たせるために大震災における原発と火との関連性も持たせた。そして二部合唱を前提に歌から入っていく。初めて一曲を学級全体で歌った時に「『おお〜』って思ったのが忘れられない」というAの感想に子どもたちの気持ちの変化が示されている。

しかし女子の中でソロ二人を誰がやるがなかなか決まらないう。やりたい気持ちがあるのに遠慮しあっており、担任がいないところで決めさせたという。

曲のめどがついた頃、台本を何とか完成させて手渡す。子どもたちの取り組みは素早かったが、練習が始まると声の抑揚、大きさ、速さ、目線、体の向き、顔の向きなどに困惑した。しかし歌で気分転換しながら子ども同士で話し合い、お互いに意見を出し合って進める。担任も含めて「産みの苦しみ」を味わい、毎日のように佐茂さんからのアドバイスをもらう。「ハゲ

タカ」がプロメテウスを攻撃するシーンでは、激しさを表現するのは「動」だけではなく、「静」も必要なことに気づいたのは本番三日前。また、見る人に理解してもらうために解説のための小芝居も必要だと追加したのは二日前であった。

総練習、本番では多くの人の前で自分たちが積み重ねたことを披露するのが楽しくてしようがない様子だったという。「緊張せず 歌も語りも 最高だ！」「終わった後、自分でも感動しました」「6年生全員で練習にはげみ、笑いあい、考えあひした結果です。もう何も悔いはありません」「堂々とすれば『カッコいい』ことがわかりました」。こうした子どもたちの感想がすべてを物語っている。保護者や観客にも大きな感銘を与えた。

佐茂さんの前任校で全校ぐるみの表現活動が実践されていたことを別の機会に伺ったことがあるが、この学校においても次年度には全校に広がるであろう。

なお、安住さんは低学年からの学力の積み上げに不十分で特別な配慮が必要な一人の男子に対し、五年生の時から①固定しがちな周りからの評価を変える ②「やればできる」という実感を得られるようにする ③目に見える「プラスの評価」（客観的事実）を残す、という三点を関連させながら様々な工夫をしており成果が見られ、本人も「先生、最近学校楽しいんだよね。めんどくさいけど勉強もわかるんだよね」と言うまでに成長している。

2 総合的な学習の意味

岩見沢市立日の出小学校の村越含博さんは「子どもたちは地域から何を学び何を考えたのか」との報告を行った。

前任校での「芦別メロン」学習では、子どもたちはその発祥が現在はダムに沈む集落であったことを知り、聞き取りを通して地域で頑張りようにも頑張れない大人の姿に出会い、何かできないかとの思いに駆られる。メロンを栽培し、地域の大人たちの協力も得ながら道の駅での展示物の掲示やメロン販売、テレビでの制作CMの放送などを実現させる。

また、地域の炭鉱の歴史の学習で戦前から戦後にかけての出炭量のグラフを見ながら、国語の戦争教材の学習とも結びつき、戦時中は誰が石炭を掘ったのだらうという疑問から「強制連行」の事実にとどり着いたという。

現在の四年生の社会科「こみはどこへ」の学習では、岩見沢市のごみ処理場が三年後には満杯となり、焼却処分に変わることを知り、子どもたちは「こみが0にはならないだろうか」ということを考え始めたという。

こうした実践をふまえて村越さんは、総合的な学習の時間を「探求活動」とする現学習指導要領の提示を飲み込むような形で、実践に生かしていくことを提案している。教科の学習をつなげ、

総合で学んだことを教科に映し出していくためにも、地域で、地域を学ぶことの重要性を再確認し共有することが大事だという提言に大賛成である。

二、高校生にふさわしい学習と社会参画

1 東日本大震災をテーマとした学習

毎年のように多彩な視点での授業実践を本分科会で発表してくれている江別高校の池田考司さんの今回のテーマは「東日本大震災と子どもたちの発達・社会参画」であった。池田さんは「現代日本における最大の問題が、子ども・若者の社会参加・参画の機会の剥奪にある」との視点で実践を構想している。

昨年は原発についての五時間の授業を行ったが、深刻な震災被害と復興に関する学習をどう作り上げるかが整理できずにいたが、被災地の復興⇨未来を東北の人々の立場から国民として考えていく場を作り出していくという視点が定まった。そして同僚の佐藤豊記さんとともに、三年の政治・経済での宮城県立石巻工業高等学校との「東日本大震災にかかわる」対話・交流授

業計画を作成する。引き受けてくれる学校を探すのが一苦労だったという。

六月に石巻工業高校を紹介した番組を見せ、石巻市内の高校生の震災後一年の座談会を読んでもらい、夏休みに教員二人で被災地を訪問し被災地の復興について授業で考えていくことを伝えると、「行きたい」という生徒が多数出てきたという。当初は一二名いたが、経済的負担についても話し六名に絞り込まれた。

八月、六・七日に実施され生徒さんからの話を聞いたり現地を見て回る。参加した生徒たちの感想を読むと、大変さを実感し、今の自分たちの状況を「当たり前」にとらえてはいけない、自分の悩みはちっぽけなもの、同情されることは求めていない、そしてたくさんの人に忘れてしまわないように伝えたいという思いが共通していた。

九月末の報告会(全校約千名に)、一〇月下旬にSkypeによる両校生徒有志の交流が行われ、その後の予定として二月のインターネット対話、被災地復興・支援のための提言作成があげられており、その様子も何う機会を持ちたいものである。池田さんの最終目標はこの問題を通して「社会参加・参画体験」を生徒たちが実現することにある。

2 復興支援・東北の物産販売高校生プロジェクトの活動

岩見沢農業高校の穴戸俊雄さんは「つながること、そこから生まれるもの」「おもい」をつなぎ、「おもい」のネットワークを！」と題して表題の活動を紹介してくれた。池田さんの教科の学習に対してこちらは岩農ボランティア同好会を中心とした取り組みである。

八月二六日の岩見沢市での「ボランティアフェスティバル」において市内三校のボランティア部・同好会が協力し、東北の物産販売を行った。これが実現した背景として、穴戸さんが顧問を務める岩農ボランティア同好会の年間二〇種類にもおよぶ多彩な活動と地域の団体や組織とのつながりがあった。

前年八月の「学童・生徒のボランティア研修会」において、生徒主体の「研修会」の名にふさわしいものにするため穴戸さんが積極的な企画の提案をし、それが受け入れられて充実した内容となったことから関係する大人たちの高校生を見る目が変わったという。

その後、「プロジェクトクリスマス二〇一一」では実行委員長である青年会議所のMさんからの連絡があり、市内四校の高校生が準備の段階から関わり三つのグループに分かれて活躍し地域の方々との結びつきが形になる。

次年度の五月には社会福祉協議会のSさんから今年の「研修会」についての相談があり、八月のフェスティバルで高校生が

何かできないかということでは話が進んだ。そして、三校の代表約二〇名での話し合いで先のような取り組みが決まったのである。総務、支援金・当日準備、前売予約券、宣伝、東北の今の五つの大グループに分かれて、三校八六名が参加して活動が行われる。支援金は一口五〇〇円で団体個人にお願いし、約六〇万円が集まり打ち切ったという。

当日の会場でのテントの割り当て二張りのひとつは物品販売に、もうひとつは「東北の今」、生産者からのメッセージ、これまでの取り組みの展示ブースとなった。多くの方からの励まし等のメッセージが書かれ、終わった後の高校生の感想もすべて前向きのものであった。来年に向けての話しも始まっている。

なお、金銭面の責任を社会福祉協議会が担ってくれたこともスムーズに進んだ大きな要因だったという。

三、子どもたちの支援と専門家との連携

1 教育相談と養護教諭の関わり

以前高校で六年間勤めた経験があり、現在は札幌の中学校で期限付きの養護教諭をしている齋藤知子さんから表記の報告が

行われた。どうしたらより早くと確に保健室の役割を伝えることができるのかを探り、保健日誌の活用を考え来室者の記録とともに気になった生徒の出来事や語りを記録して管理職に提出した。

とても効果があったが不十分なので「学びの支援コーディネート」にも回覧することを提案した。担当の先生は放課後の情報を丁寧に聞いてくれて、担任や学年にも上手に伝えてくれたという。さらに生徒指導部長にも回覧し連携が進んだ。口頭で具体的な事例も紹介された。

予防的な取り組みとして、「コミュニケーショントレーニング」にも取り組んでおり、スクールカウンセラーもかわわっていているがまだ全体のものになっていないという。教師同士が本音で語れる場を大切に、チーム支援を進めることが大切だとまとめられた。

2 少年非行への対応と付添人活動

札幌弁護士会の中村憲昭さんが「司法の場で出会う子供たち」非行少年と付添人活動」と題して貴重なお話をしてくださいました。まず、少年事件は北海道においても全国と同様に事件数も凶悪事件も減少傾向にあることを示した上で、少年事件の手続きについて丁寧に解説され勉強になった。

そして審判手続きにおける付添人の役割の重要性を述べられた。調査官と一緒に何が必要かを判断するが、調査官はかなりいろいろな情報をくれる。記録が正式に出てからでは遅く、鑑別所にいる時のかかわりが最も重要である。

少年に対する接見ののポイントについては、付添人の役割（一緒に考える立場）を理解させる、少年を信じる（ふりをすることもある）、嘘をつかせない、もし自分が被害者だったらと考えさせる、対策を教えない等である。具体的なケースの紹介もあり、最後に教員の方は大いに弁護士を活用してほしいと強調された。特に付添人は弁護士が望ましいとのことであった。

3 定時制高校における学力補充

函館工業高校定時制課程の松島正さんは「定時制高校での基礎学力をつけるHRでの取り組みについて」報告された。

一学年三クラス、約九〇名の学校である。

中学校時代に不登校だったり欠席が多く基礎学力が抜け落ちている生徒が増え、学力補充の取り組みが各担任の工夫で登校からSHRまでの時間に行われている。松島さんは文章力、表現力、計算力に関して、コラム読み、英単語の練習、クロスワードパズル、地名や山、河川名、百ます計算、方程式・面積・体積の計算などを実施した。現在でも取り組んでいる一名は力

をつけてきているという。

共同研究者を含めた参加者からは、同じ内容であつても生徒の関心とかみ合わせるための様々なアイデアが出され、今後それらを取り入れて実践してみたいとの意欲が述べられた。

4 教師としての成長

水木大成さん（仮名）からは「人間らしさの獲得―柔軟な教員を目指して」と題して率直な自己開示がなされた。

周囲からは「融通が利かない」「堅物である」等々よく言われる。他者とのかわりが苦手ということになるが、自分ではそういう自覚はあまりない。教員には向いていないということもよく言われたという。

その後、二年間二つの職場で努力したことの紹介があつた。また生徒へのアンケートも行い、その結果を率直に受けとめている。日常よく接している参加者からも率直なアドバイスもあつたが、教師としての成長を否定する声はなく、むしろ励ましの方が多かった。

教師としての大事な二つのポイントは、担当教科について生徒の状況に合わせたわかりやすい授業をすることと、生徒の内面を深く読みとり適切なかわりをする（そつとしておくことも含め）ことかと思う。当然そのやり方には個性もあるので、

それを大事にしながら学んでいく必要があると思う。

そして、信頼できる複数の同僚に具体的な事実をもとにしたアドバイスをもらうことも必要であろう。信頼できない人の声を聞く必要はない。生徒へのアンケートについても、できれば内容をその方々に相談して実施し、結果の読み取りも一緒にやっていただいたほうがよいと思う。

最終的に自分が向いていないと納得したら別の道に進むこともあり得ることを胸に秘めて、努力を続け成長することを願いたい。

おわりに

以上のように今回かなり重要な視点が深められた。今後さらに多様な参加者を得て議論が深められることを期待したい。